



来るべき裁き

パウロが正義や節制や来るべき裁きについて話すとフェリクスは恐ろしくなり、「今回はこれで帰ってよろしい。また適当な機会に呼び出すことにする」と言った。

(使徒言行録 24 章 25 節)

使徒パウロはローマ帝国の総督フェリクスで2年あまり監禁されていました。

フェリクスがユダヤの総督でいたのは、紀元52年から59年まで、彼はローマ帝国の武力を頼み、強権的な支配によって治安維持をはかろうとしたので、評判の悪い人でした。また、妻のドルシラはもともとシリアの小国の王の妻でしたが、たいへんな美人だったようで、フェリクスはある時、ドルシラを一目見て情熱を燃やし、自分の友人で魔術師だという人物を彼女のもとに送って、夫を捨てて自分と結婚するようにそそのかしました。これを受けてドルシラはフェリクスと結婚、彼の第三夫人の座におさまっていました。

権力者フェリクスとドルシラの夫婦が囚人のパウロを呼び出し、キリスト・イエスへの信仰について話を聞こうとした時、パウロには二人を前にして、「神様がすべて赦してくれますよ」などと安易な救いを語ろうとする誘惑が必ずあったと思うのですが、そうはしないで、「正義や節制や来るべき裁きについて」話しました。すると総督は恐ろしくなり、「今回はこれで帰ってよろしい。また適当な機会に呼び出すことにする」と言って、帰らせました。

パウロが二人に、正義と節制という彼らに最も足りないことだけにとどまらず、来るべき審判についても話ると、フェリクスの中にあって眠っていた良心が目覚めさせられました。しかし、それは長続きしません。良心がちくりと刺すのを覚えながら、それを封印してしまったり、まじめに対峙することを先延ばしにして、貴重な機会をつぶしてしまうことは、多くの人に起こります。

「良心」とは新約聖書で原語から調べると、「共に」という言葉と「知る」という言葉が

2020年8月発行

組み合わさって出来ています。つまり「共に知ること」を意味しているのです。英語でも良心はconscience(カンシャンス)です。con(カン)は「共に」、science(シヤンス)は「サイエンス」と同じスペルで、知るとか知識という意味があります。「共に知る」、ではだれと共に知ることなのか、パウロにとってそれは神で、彼は来るべき裁き、神の審判を信じていましたから、神に対しても人に対しても、責められることのない良心を絶えず保つように努めていたのですが、フェリクスは、それまで暴虐な支配を行い、人妻を奪っていたので、「来るべき裁き」を聞いて、恐ろしくなったのです。

かりに「来るべき裁き」というのが全くなければ、人は罪を恐れる必要はないわけです。人を殺して法による裁きを恐れることはあっても、法の網からうまく逃げのび、また良心の呵責など紙くずを放るよう棄て去ることが出来るなら、枕を高くして寝ることが出来ます、神が存在せず、来るべき裁きがないなら、何も恐れることはないのですが、しかし、そんなことはありません。

神様がおられ、来るべき裁きがあるのです。だったら、良心の呵責を感じながらフェリクスのように、「また適当な機会に呼び出すことにしよう」というのんきな態度を取ることなどとても出来ないことがわかります。「最後の審判」は遠い将来のことに見えるかもしれませんが、人は必ず死ぬものであり、神様にとっては千年も一日なのですから、悪人はいうまでもなく、自分では善人だと思っている人であっても、復活して神様の前に立つことを恐れるのは理の当然なのです。

もちろん私たちの前には、イエス・キリストがすべての人の罪を背負って十字架にかけられたという、罪の赦しの福音が差し出されています。しかし、これは決して安上がりな恵みではありません。神様のなすことに本当に恐れを感じてこそ、救いの恵みの有難さが身にしみてわかります。今という機会を逃してはなりません。

(2020年8月2日の礼拝説教より)

牧師 井上 豊